成果連結（資金貸借取引）

【重要性：A】

ＰＯＩＮＴ！

①　貸付金と借入金の相殺消去の意味を理解しよう！

②　連結仕訳をマスターしよう！

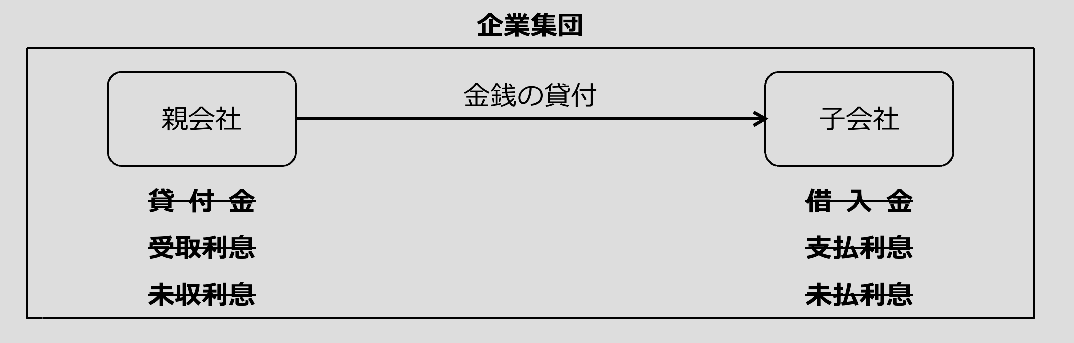
主な勘定科目

「貸付金」勘定（資産）･「借入金」勘定（負債）

「受取利息」勘定（営業外収益）･「支払利息」勘定（営業外費用）

親会社が子会社に金銭を貸し付けている場合、連結上は内部取引に該当します。そこで、連結上は取引がなかったとするため、「**貸付金と借入金の相殺消去**」を行います。

また、それに関連する「**受取利息と支払利息の相殺消去**」や「**未収利息と未払利息の相殺消去**」も行います。



例題　**親会社P社は当期首に子会社S社に対して、期間3年で8,000円を貸し付けている。当期末に利息として100円を受け取っている。なお、未収利息は生じていなかった。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。**

①　個別上の仕訳

・親会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
長期貸付金	8,000	現金預金	8,000
現金預金	100	受取利息	100

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
現金預金	8,000	長期借入金	8,000
支払利息	100	現金預金	100

②　連結上あるべき仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

③　連結仕訳（②－①）

借方科目	金額	貸方科目	金額
長期借入金	**8,000**	**長期貸付金**	**8,000**
受取利息	**100**	**支払利息**	**100**

成果連結（貸倒引当金の消去）

【重要性：A】

ＰＯＩＮＴ！

①　貸倒引当金の消去の意味を理解しよう！

②　連結仕訳をマスターしよう！

主な勘定科目

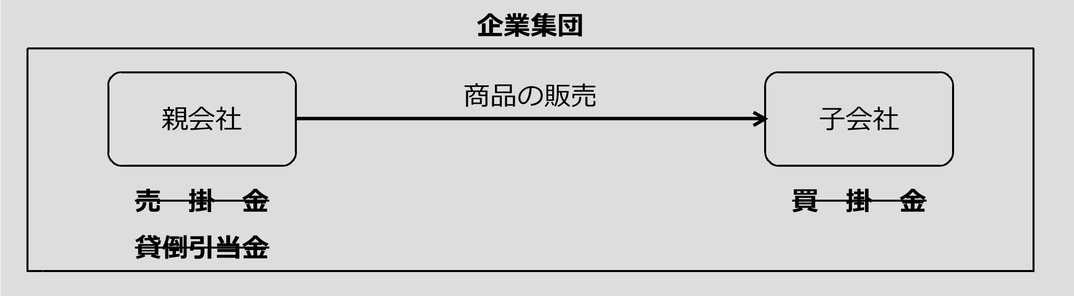
「貸倒引当金」勘定（資産のマイナス）

「貸倒引当金繰入」勘定（販売費及び一般管理費）

「利益剰余金当期首残高」勘定（連結株主資本等変動計算書項目）

（１）貸倒引当金の消去

　個別上、売上債権や貸付金等に貸倒引当金が設定されていて、連結仕訳によってこれらの債権が消去された場合、設定対象の債権がなくなったので、これに対応する貸倒引当金も消去します。



例題　**親会社P社は決算日において、子会社S社に対する売掛金が5,000円ある。この売掛金に対して、100円の貸倒引当金を設定している。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。**

①　個別上の仕訳

・親会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
売掛金	5,000	売上	5,000
貸倒引当金繰入	100	貸倒引当金	100

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕入	5,000	買掛金	5,000

②　連結上あるべき仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

③　連結仕訳 {(②－①)、売上高と仕入高の相殺消去は省略します}

借方科目	金額	貸方科目	金額
買掛金	**5,000**	**売掛金**	**5,000**
貸倒引当金	**100**	**貸倒引当金繰入**	**100**

（２）前期に貸倒引当金の消去を行っている場合

前期の連結仕訳で貸倒引当金の消去を行っている場合、当期の連結仕訳に影響を与えるので、注意が必要です。

まず、前期の連結仕訳で「貸倒引当金繰入」を消去した金額は、当期の連結仕訳において、「**利益剰余金当期首残高**」となります（これを前期の連結仕訳の「**引継**（成果連結の開始仕訳）」といいます）。これは資本連結における開始仕訳と同じ考えで、前期の費用の減少は前期の利益を増加させ、前期の利益剰余金を増加させます。その結果、当期の「利益剰余金当期首残高」が増加するからです。

次に、通常、貸倒引当金は差額補充法で設定します。前期に相殺消去された債権に対する貸倒引当金と当期に相殺消去された債権に対する貸倒引当金の差額が、当期の連結仕訳における「貸倒引当金繰入」の金額となります。したがって、前期と当期に相殺消去される債権の大小関係で以下の２つの連結仕訳があります。

①　前期の相殺消去された債権　＜　当期の相殺消去された債権

借方科目	金　額	貸方科目	金　額
貸倒引当金	×××	**利益剰余金当期首残高**	×××
		貸倒引当金繰入	×××

利益剰余金当期首残高：前期に相殺消去された債権に対する貸倒引当金

貸倒引当金：当期に相殺消去された債権に対する貸倒引当金

②　前期の相殺消去された債権　＞　当期の相殺消去された債権

借方科目	金　額	貸方科目	金　額
貸倒引当金	×××	**利益剰余金当期首残高**	×××
貸倒引当金繰入	×××		

利益剰余金当期首残高：前期に相殺消去された債権に対する貸倒引当金

貸倒引当金：当期に相殺消去された債権に対する貸倒引当金

例題　**親会社P社は子会社S社に対する売掛金が前期末に5,000円（これに対する貸倒引当金100円）、当期末に8,000円（これに対する貸倒引当金160円）あった。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。なお、P社では、個別上、貸倒引当金繰入2,000円を計上している。**

①　個別上の仕訳

・親会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
貸倒引当金繰入	60	貸倒引当金	60

貸倒引当金繰入：160－100＝60

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

②　連結上あるべき仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

③　連結仕訳

・前期の引継（開始仕訳）

借方科目	金額	貸方科目	金額
貸倒引当金	100	利益剰余金当期首残高	100

・期中仕訳（②－①）

借方科目	金額	貸方科目	金額
貸倒引当金	60	貸倒引当金繰入	60

・まとめ（前期の引継＋期中仕訳）

借方科目	金額	貸方科目	金額
貸倒引当金	**160**	**利益剰余金当期首残高**	**100**
		貸倒引当金繰入	**60**

例題　**親会社P社は子会社S社に対する売掛金が前期末に50,000円（これに対する貸倒引当金1,000円）、当期末に40,000円（これに対する貸倒引当金800円）あった。そこで、必要な連結仕訳を答えなさい。なお、P社では、個別上、貸倒引当金繰入2,000円を計上している。**

①　個別上の仕訳

・親会社（S社に対する分のみ）

借方科目	金額	貸方科目	金額
貸倒引当金	200	貸倒引当金繰入	200

貸倒引当金：1,000－800＝200

（注）P社では個別上、貸倒引当金繰入2,000を計上していますが、子会社S社に対する売掛金の分200だけ、貸倒引当金繰入が少なく計上されています。

・子会社

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

②　連結上あるべき仕訳

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕訳なし			

③　連結仕訳

・前期の引継（開始仕訳）

借方科目	金額	貸方科目	金額
貸倒引当金	1,000	利益剰余金当期首残高	1,000

・期中仕訳（②－①）

借方科目	金額	貸方科目	金額
貸倒引当金繰入	200	貸倒引当金	200

・まとめ（前期の引継＋期中仕訳）

借方科目	金額	貸方科目	金額
貸倒引当金	**800**	**利益剰余金当期首残高**	**1,000**
貸倒引当金繰入	**200**		